台大日本語文研究第 39 期
2020 年 06 月，頁 131-162
2020-03-30 收稿，2020-06-01 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202006_(39).0006

在日本成長日台混血升學進入台灣的大學之過程

服部美貴*

摘要

在台灣就讀大學部本科的日籍留學生當中，也有不少出生背景根源自台灣的學生。但是，擁有這種根源背景應該不是決定升學進入台灣的大學之唯一因素。

本研究對象為在日本長大、日本高中畢業之後，就讀台灣國內大學的 3 名日台混血。將他們三人在進入台灣的大學就讀為止的過程，使用「複線徑路·等至性模式」（Trajectory Equifinality Model :TEM）給予可視化分析，進一步考察過程中存在的選項和影響其選擇的因素，以及研究對象在經歷中文學習的相關經驗和意識變化。

升入台灣的大學過程因人不同，但，經過本研究則指出 3 個促進要因—「家庭」「親戚」「自覺」為相關的共同因素。

母親的母語方面，研究對象在家庭裡的日常皆使用日語，並沒有進行傳承中文或台語，因研究對象不會講她／他們母親的語言，所遇到的經驗也因人而異。

從研究對象的故事中，能夠看出她／他們母親對孩子成長的參與有主體性，尊重孩子們的自主性、重視與台灣親戚的交流、必要時會提供適當的升學資訊等。

今後希望得到更多研究對象的協助，祈能在多樣化社會中能夠提出各種升學路徑背後的不同努力過程。

* 臺灣大學日本語文學系講師

臺灣大學學術期刊資料庫

關鍵詞：日台混血、在台本科大學生、進入大學過程、複線徑路·等至性模式（Trajectory Equifinality Model :TEM）、傳承母語

臺灣大學學術期刊資料庫

Process of Selecting Courses by Students Who Grew up in Japanese-Taiwanese Intercultural Families in Japan

HATTORI Miki*

Abstract

In Taiwan, there are certain numbers of university students from Japan who have their family roots in Taiwan. On the way to enter university in Taiwan, what kind of options were there and how did they select this course?

This study aims to clarify those options and process of making decision by three Japanese students who grew up in Japanese – Taiwanese intercultural families, and entered university in Taiwan as a degree student. Trajectory Equifinality Model (TEM) was used to visualize this process.

Result shows that each of the three has different way from the other two. On the other hand, three common factorswere found, which are family, relatives in Taiwan, self-awareness, to promote their decision,.

Since their mother conducts very good Japanese, Chinese or Taiwanese were not inherited in their family and they had each different experience and attitude to it.

Life stories of these subjects gave a glimpse of their mother acting an initiative role in their family by considering their children's independency and relationship with relatives in Taiwan, giving appropriate support to children when it is needed.

臺灣大學學術期刊資料庫

* Lecturer of Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

Further research is needed to indicate different aspects of process of selecting courses by person who has plural cultural background.

Key words: Japanese-Taiwanese intercultural family, selecting course , process of selecting courses, Trajectory Equifinality Model, inheriting mother tongue

臺灣大學學術期刊資料庫

日本育ちの日台「ハーフ」の進路選択過程

服部美貴*

要旨

台湾の大学で本科生として学ぶ日本人留学生の中には、台湾にルーツを持つ人も少なくない。彼らが台湾の大学への進学を決める過程にはどのような選択肢がありどのように選択をしてきたのか。

本研究では、日本で育ち高校卒業後に台湾の大学に進学した日本人の父親と台湾出身の母親を持つ日台「ハーフ」3 名を対象に、彼らが台湾の大学への進学過程を「複線径路・等至性モデル（TEM）」によって可視化し、更にその過程にあった選択肢とその選択に関わる要因及び中国語習得をめぐる対象者たちの経験と意識を考察した。

台湾の大学への進学の過程は三人三様であったが、その中には共通する 3 つの促進要因である【家庭】と台湾の【親戚】と自身の【自覚】が見出された。また、対象者 3 名の家庭内では中国語は継承されておらず、高校卒業までは中国語はほとんど話せなかった。この点に関する経験も、対象者によって異なるっている。

対象者の語りからは、子どもの主体性を尊重しつつ、台湾の親戚とのつながりも大切にしながら、必要に応じて子どもの進路に寄り添う主体的な母親の姿を垣間見ることができた。

今後も家庭や進路の多様化が進む中での異なる過程の様相を示していきたいと考える。

キーワード：日台「ハーフ」、台湾への進学、進路選択過程、
複線径路・等至性モデル（TEM）、母語継承

* 台湾大学日本語文学科講師

臺灣大學學術期刊資料庫

日本育ちの日台「ハーフ」の進路選択過程

服部美貴

一、研究の背景

（一）台湾で学ぶ日本人留学生

台湾の大学に本科の正規生[1]として在籍する日本人留学生には、台湾にルーツを持つ人もいる。その中で、高校を卒業して台湾に来てから中国語[2]学習を始めたという人も珍しくはない（服部 2018）。

日本で育ち、高校まで日本の学校教育を受けてきた彼らが台湾の大学に進学する際には、「僑生」[3]或いは「國際生」[4]として、台湾の高校の卒業生とは異なる手続きを経る[5]。

台湾への進学を考えた時点では大学生活を送れる中国語能力を備えているわけではなく、周囲の多数が日本国内に進学する環境の中で、単に親のルーツが台湾にあるというだけで台湾への進学を決めたわけではないであろう。そこには人それぞれの異なる道筋があるに違いない。

---

1 本稿では、学位取得を伴う大学本科の学生としての留学生を「正規生」、語学習得を目的として学位取得を伴わない留学生を「語学留学生」、所属大学から協定により一定期間限定在籍する留学生を「交換留学生」と呼ぶ。

2 本稿の「中国語」は、台湾で「國語」として使用されている台湾華語を指す。

3 海外聯合招生委員會 HP> 僑生來臺就讀大學校院學士班 日本地區簡章（西元 2020 年秋季入學適用）
https://cmn-hant.overseas.ncnu.edu.tw/sites/default/files/inline-files/03_109%E6%97%A5%E6%9C%AC.pdf

4 駐馬來西亞臺北經濟文化辦事處>教育留學>僑生,外生身分認定與權益比較 https://www.taiwanembassy.org/my/post/219.html 全國法規資料庫>中央法規>所有條文>外國學生來台就學辦法 https://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?PCode=H0110001

5 「僑生」「國際生（外籍生とも言う）」の入学資格や定員は各大学の学科によって異なる。例として国立台湾大学と国立台北科技大学を挙げる。
國立臺灣大學國際事務處>國立臺灣大學 109 年度系所申請規定及招生名額一覽表 https://oiasystem.ntu.edu.tw/admission/foreign/requirement/dept.list/id/37/fsemester/1/fdegree/B/flang/2/fdisplay/1
國立台北科技大學國際事務處>境外學位生>身分比較 https://oia.ntut.edu.tw/p/412-1032-9100.php?Lang=zh-tw

臺灣大學學術期刊資料庫

（二）台湾と日本の国際結婚

台湾内政部の 2020 年 4 月の統計[6]によると、外国籍の配偶者総数は 560,617 人で、うち中国大陸出身者は 62.5%を占め、香港、マカオ出身者を含めると 66%に上る。残りの 34%の中ではベトナム（約 20%）が最多で、インドネシア（5.5%）、タイ（1.6%）、フィリピン（1.8%）、日本（0.9%）、カンボジア（0.8%）と続く。

それら上位の国々の出身者は圧倒的に女性が多い[7]が、日本は男性 2,353 人、女性 2,794 人の計 5,147 人で、男女比がほぼ同じである点が、他国にはない特徴の一つである。

一方、日本政府による 1965 年から 2017 年の婚姻件数の統計[8]を見ると、2006 年の 6.1%をピークに総婚姻数に対する国際結婚の割合はやや低下しているが、2017 年までは 3%余りを上下している。性別では、1976 年に外国籍配偶者が女性である婚姻件数が外国籍配偶者が男性である婚姻件数を上回り、以来 1980 年代半ばから 1990 年代初めにかけては、外国籍配偶者が女性である婚姻の割合が 2 倍になった。その後 2004 年から数年は外国籍配偶者が女性である婚姻件数はその逆の組み合わせの 4 倍になり、その後 2017 年に至るまでは約 1.5 倍となっている。

外国籍の女性配偶者の出身国[9]は 1982 年までは韓国・朝鮮が 5 割を占めていた。その後は中国の割合が増え、1995 年以降は韓国・朝鮮を抜いて最多となり、2008 年から 2014 年までは 4 割を越え、2017 年は 34.6%となっている。

台湾人配偶者は日本の戸籍には「中国」国籍と記載されるため、日本の統計では台湾出身の配偶者数を把握することはできない。

---

6 内政部移民署 HPwww.immigration.gov.tw>media >統計資料>外籍配偶（含大陸、港澳地區人民）>外籍配偶人數與大陸(含港澳)配偶人數按證件分 10904（統計期間 1987 年 1 月~2020 年 4 月）

7 例えば、2018 年 8 月時点でのベトナム出身配偶者の男性は 1,412 人、女性 102,511 人、インドネシア出身配偶者は男性 665 人、女性 29,188 人となっている。日本の次に多い韓国でも、男性 615 人、女性 1,067 人である。

8 e-Start 政府統計の総合窓口 統計で見る日本 https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003214861

9 結婚手続き当時の国籍であり、その後日本に帰化する場合もある。外国籍の男性配偶者も同様である。

臺灣大學學術期刊資料庫

（三）本研究の動機と目的

本稿では、日本で育ち日本の高校を卒業した後、台湾の大学に本科の正規生として在籍或いは卒業した日本人留学生で、日本人の父親と台湾出身[10]の母親を持つ日台「ハーフ」[11]3 名を対象とする。対象者を日台「ハーフ」にしたのは、次の 3 点の理由による。

まず、筆者がこれまでに勤務校の授業や課外活動で知り合う日本人留学生には台湾にルーツを持つ人が珍しくはないが、その多数が「母親が台湾出身」「日本の父親の日本の姓」「日本国籍のみを取得」であるという実感に基づく。

二つめの理由は、筆者の勤務校の台湾人卒業生たちから毎年のように日本人と結婚した知らせが届くが、その多くが女性という点にある。彼女たちの多くは結婚後は日本に居住し、更に子どもを持つと、中国語の継承や学校教育に深い関心を持つようになっている。

三つ目は、子どもの進路選択過程において母親の役割が大きいという理由である。中高生、大学生の進路選択に際し、相談相手となっているのは、父親よりも母親の方が多数であるという日本の調査結果がある[12]。

筆者が台湾における日本語継承活動に 15 年余り関わる中で、異国の言語と教育システムで育つ子どもの将来の進路に強い関心を抱く日本人の母親に多く接しているが、子どもの成長過程への異国出身の母親の影響や関わりを逆の立場からも明らかにしたいと考えたことが、本研究の動機である。

---

[10] 既に日本国籍を取得している母親もいるため、「台湾出身」とした。

[11] 本稿では便宜上、日本人の父親と台湾出身の母親を持つ人を、日台「ハーフ」と呼ぶ。国際結婚の両親から生まれた人への「ハーフ」という呼称に対しては、「半分」という意味から否定的な意見も多く、「ダブル」「ミックス」という呼称もある。本研究での対象者たちは自らを「ハーフ」と呼び、それには否定的な意味合いは含まれていなかったことから、筆者もそうした意見を理解しつつ対象者本人の言葉を尊重する意味で、「」付きの「ハーフ」を使用する。また、日本人の父親と韓国の母親は「日韓」、日本人の父親と中国の母親は「日中」、逆の組み合わせは「台日」「韓日」「中日」となる。

[12] (社)全国高等学校 PTA 連合会・(株)リクルート合同調査調べによる「高校生と保護者の進路に関する意識調査」(2019) http://souken.shingakunet.com/research/2019_hogosya4.pdf

臺灣大學學術期刊資料庫

教育システムの選択は、義務教育期間は親の居住地、家族構成、親の仕事、収入等、家庭要因の影響を受けるが、大学への進学は、その成長段階により本人の意志がそれまで以上に反映されることになる。留学には正規留学、交換留学、語学留学等の形があるが、本研究では入学試験、在学期間、言語生活等、周囲とは大きく異なる準備が必要となる正規留学の本科生に限定した。

家族や仕事の形態は多様化が進みつつあり、居住国や夫婦の組み合わせは異なるとはいえ、現地の言語と教育システムの中で育つ子どもが親の出身国の大学に進学する過程は、異国で子育てをする親にとっての一つの指針になり得る。台湾在住の台日婚姻家庭の子どもへの日本語教育及び進路選択にも参考になると考える。

対象者たちが高校卒業まで日本の教育を受け、台湾の大学への進学に至る過程において、どんな選択肢があり、それをどのような理由で選び取ってきたのか。それを「複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: TEM）」によって可視化し、更にその選択に関わる要因と、中国語習得をめぐる対象者たちの経験と意識を考察することを本稿の目的とする。

二、先行研究

（一）日本在住の複数言語家庭における継承語

複数の言語背景を持つ子どもであっても、現地社会や学校で使用されていない言語を習得するには、多大な努力が必要である。

陳（2013）は、東京在住の「在日台湾人」と日本人の配偶者である「新来台湾人」を対象 に、彼等の言語・文化・アイデンティティの重層性と変容を社会言語学的視点で考察した。それによると、(1) 子どもへの台湾文化・言語の継承を希望はするものの、言語生活場面では日本語を使用している傾向、(2) はじめはほぼ全員が子どもに日本語・中国語の同時進行教育を行うが、子どもの幼稚園入園後には日本語を中心とした教育方針に転換、(3) 家庭における中国語学習教材や手紙や日記を書くことの意識的な導入と中国語能力の正

臺灣人學術期刊資料庫

の相関等の結果が得られた。また、既存の台湾人エスニックグループに参加する若い世代の減少の背景には、インターネットでの繋がりの普及、旧世代との意識の変化、「台湾語」使用者から「台湾中国語」使用者への世代交代があると分析する。

また、親の期待に反して子どもの成長につれて親も子も日本語使用が圧倒的に多くなるのは、「日本の学校システムにおいて異なった文化を持つ子どもに同化を強いる様々なメカニズムが働いた結果だとも言える」（陳 2013：20）としている。

この同化圧力は子どもだけではなく、台湾出身の女性配偶者（黃 2011）や台湾からの留学生及び就労者にも作用しており（塩入 2019）、日本の学校や社会の中で日本語以外の使用や日本とは異なる文化様式で生活することの困難さが指摘されている。

英語使用者についても同様のことが報告されおり、Yamamoto（2001）等では日本の同化圧力が日本在住の国際結婚家庭の子どもや帰国児童生徒等の英語力の保持が容易ではないことの一因とする。

多くの研究で日本の同化圧力が指摘される一方で、日本在住の日韓家庭と日中家庭の日本人父親を対象にした渡辺他（2016）は、家庭内での役割に目を向けている。そこでは、外国出身の母親の言語の継承が難しいことの要因として、継承語教育に日本人父親は積極的な役割を果たしていないこと、外国出身の母親の高い日本語能力と相対的に低い父親の日本語以外の言語能力が挙げられている。

韓国在住の韓日家庭と日本在住の日韓家庭の言語使用について調査した花井（2016）によると、前者では子どもに対して日本人の母親による日本語継承が行われている割合が多い一方で、後者では韓国出身の母親は日本で日本語を使用しており、子どもも韓国語を習得していないことが多い。その一つの要因として、日本在住の日本人の父親の留学などの移動が少なく、外国語習得レベルも高くない一方で、韓国出身の母親は日本語能力が高いため、家庭内の日本語使用頻度が高くなるという傾向が明らかになった。また、韓国人母は高い日本語能力を持ち、日本社会に順応しており、韓国在住の日

臺灣大學學術期刊資料庫

本人母とは対極的であるとしている（花井 2016：163）。

台湾に正規留学、交換留学、語学留学をしている日台「ハーフ」5 名を対象に中国語学習のきっかけに関するインタビューを行った服部（2018）では、中国語継承については「子どもの頃母が教えようとしたが自分が嫌がるようになった」「母に教えてほしいと言ってみたが、仕事が忙しくて時間がなかった」という相反する状況がみられた。また、成長につれて自分のルーツを意識するようになり、台湾への留学を決めた点は共通しているが、5 人それぞれの家庭の状況のみならず、同じ家庭で育った兄弟姉妹でも台湾への志向性は異なることがわかった。彼らの語りからは、日本社会に順応し日本語で仕事や家庭生活をこなす台湾出身の母親の姿が垣間見られた。

山本他（2013）も、日本在住の日本人男性とアジア人女性との家庭では母親の母語が継承される可能性は低いと述べている。

複数の言語文化背景を持つ子どもの教育戦略については、額賀（2013）、竹田（2013）、山本他（2013）、川上他（2018）等の研究があるが、親を対象とした義務教育の教育システムの選択や継承語教育に関わる研究が中心で、比較的年齢が低い子どもの教育に関心が向けられている。殊に、日本で育った日台「ハーフ」の高校卒業後の進路に関して「ハーフ」本人を対象に調査を行った研究は管見の限りでは見当たらない。

本研究では、台湾の大学に進学した成人日台「ハーフ」本人のライフストーリーから、その成長過程でどのように台湾の大学への進学を志向し、選択と行動をしてきたのかを考察する。

（二）ライフストーリー研究の方法

ライフストーリー研究は質的研究のひとつであるが、その分析方法として、GTA（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）、ナラティブ・アプローチ、TEA（複線径路等至性アプローチ）、IPA（解釈学的現象学的分析）、TAE（Thinking At the Edge）等が挙げられる（末武他 2019:i）。

臺灣大學學術期刊資料庫

TEM とは、文化心理学者ヴァルシナーの理論をもとにつくられ、TEA（複線径路等至性アプローチ）を構成する質的研究の方法論のひとつである（サトウ 2015:4、三好 2019:180）。個々人が固有な径路をたどっていても、時間経過のなかで、等しく（Equi）到達する（Final）ポイントがある。これを等至点（Equifinality Point :EFP）と呼ぶ。TEM では、持続する時間（非可逆的時間：Irreversible Time）とともにある人のライフ（生命・生活・人生）の複線的な有り様を、システムのなかで、システムとして捉えようとすることを、大きな特徴としている（安田 2015：30-31）。

TEM では、必要に応じて「概念ツール」を使用し、個人の径路を TEM 図に表す。「概念ツール」とは、等至点に至るまでに通らざるを得ない経験である「必須通過点（Obligatory Passage Point :OPP）」、研究者が設定した等至点とは意味的に逆の経験を指す「両極化した等至点（Polarized EFP :P-EFP）」、個人の選択に影響する概念として、個人の選択を阻害する方向に働く力である「社会的方向づけ（Social Direction :SD）」、社会的価値と異なる選択を行おうとする個人に対して補助的・援助的に働く力である「社会的助成（Social Guidance :SG）」を指す（サトウ 2019:85-86）。この「概念ツール」により、プロセスを明確に記述し、環境と人間の関係性を読み解くことができる。

木下（2003）によって考案された M-GTA も、明確に分析の手続きが示されており、少数事例からの適用が想定されていること、また、テクストデータを元に現象に存在する理論や構造を発見したり、分析結果を視覚的に表現したモデルを描いたりできる点が TEM と共通することから、鏡他（2012）は同一データを TEM と M-GTA の方法を用いて分析した。その結果、TEM には次の特徴が見られた（鏡他 2012:205）。

・個々の事例に含まれる対象者の具体的な経験や時系列を保持しつつモデル化し、それに対する理解を深められる。
・単一事例のみを対象とする際にも有効性を発揮しやすい。

臺灣人學學術期刊資料庫

・分析結果に対する共通理解が得やすい。

本研究では、対象者が等至点（＝台湾の大学への進学）に至るまでの周囲の人や環境との相互作用による変容過程に注目することから、鏡他の知見に基づき、より具体的な経験や時系列を描き出すことが可能な TEM を分析方法として用いることにする。

三、本研究について

（一）対象者

本研究の対象者 3 名は、①日本人の父親と台湾出身の母親の家庭、②自身は日本国籍のみ、③高校を卒業するまで日本の教育を受けた日本育ち、④台北市内の国立或いは私立大学の正規生としての在籍生或いは卒業生であるという共通点を持つ。3 名の属性を表 1 に示す。名前は仮名を使用している。

表 1　対象者の属性

名前	Yoko	Teru	Sota
性別	女	男	男
日本の出身地	三重	茨城	大阪
大学入学年	2006 年	2016 年	2016 年
調査時期	2016 年 10 月	2018 年 11 月	2020 年 1 月
調査時の学年	既に卒業	大学 3 年	大学 4 年
中国語学校在学期間	2 年	1 年	2 ヶ月
大学申請枠	國際生	國際生	僑生
母親の現在の国籍	日本	日本	台湾
母親の出生年代	1950 年代前半	1960 年代前半	1960 年代前半
母親の来日契機（当時の年齢）	結婚（20 代後半）	父の仕事（中学 2 年生）	専門学校進学（20 歳前後）
兄弟姉妹	姉 2 人	姉と妹	姉 2 人と弟
父親の中国語学習歴	なし	なし	日常会話可

臺灣大學學術期刊資料庫

（二）方法

1.インタビュー

インタビューは 2016 年 10 月から 2020 年 1 月にかけて実施した。筆者の研究室で対象者と筆者が 1 対 1 で行い、対象者の承諾を得て IC レコーダーに録音し、文字化した。

質問項目は表 2 に示したとおりであるが、対象者の話の流れを尊重するため、半構造化インタビューの形をとった。インタビューの所要時間は 1 時間 10 分から 1 時間 40 分であった。

表 2　インタビュー内容

① 来台時期
② 所属している／していた大学と学科
③ 家族構成
④ 母親の日本語能力、父親の中国語能力
⑤ 台湾の大学に進学することになった経緯
⑥ 台湾の親戚との関わり
⑦ 台湾の大学進学以前の中国語学習歴
⑧ 兄弟姉妹の進路
⑨ 「ハーフ」としての経験

2. 分析方法

インタビューで得られたデータは、「複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: TEM）」に基づき TEM 図を作成する。

手順は、①文字起こしをしたデータを意味のまとまりごとに分節化する、②各対象者の経験を時間軸に沿って並べる、③分岐点を考える、④事象をつなぐ線を引き、両極化した等至点への線を引くという作業（荒川他:2012）に従うが、本研究では 3 名の個々の経験の捨象を極力少なくするために、TEM 図は対象者ごとに作成する。

太線四角内の「等至点」は、台湾の大学への入学である。台湾の大学への進学を促進する「社会的助成（SG）」、阻止する「社会的方

臺灣大學學術期刊資料庫

向づけ（SD）」をそれぞれ上向きと下向きの矢印で表す。非可逆的な時間の流れを左から右への実線の矢印、起こり得るが現実には至らなかった事象を点線の四角、その時間の流れを点線の矢印で表す。

TEM 図に表すことができない家庭環境と進路選択の背景は、各節の中で記述していく。

四、結果と考察

（一）、対象者の TEM 図とライフストーリー

本節では、YOKO、TERU、SOTA の TEM 図を示し、各対象者の台湾の大学への進学に至る過程を①台湾の親戚を含む家庭環境、②台湾への進学志向の芽生えと進学決定から入学までについて、時系列に沿って述べていく。文中の「父」「母」「祖父」「祖母」等親族名称は対象者からみた関係を、“”は、対象者の発話の引用を表す。

1. YOKO

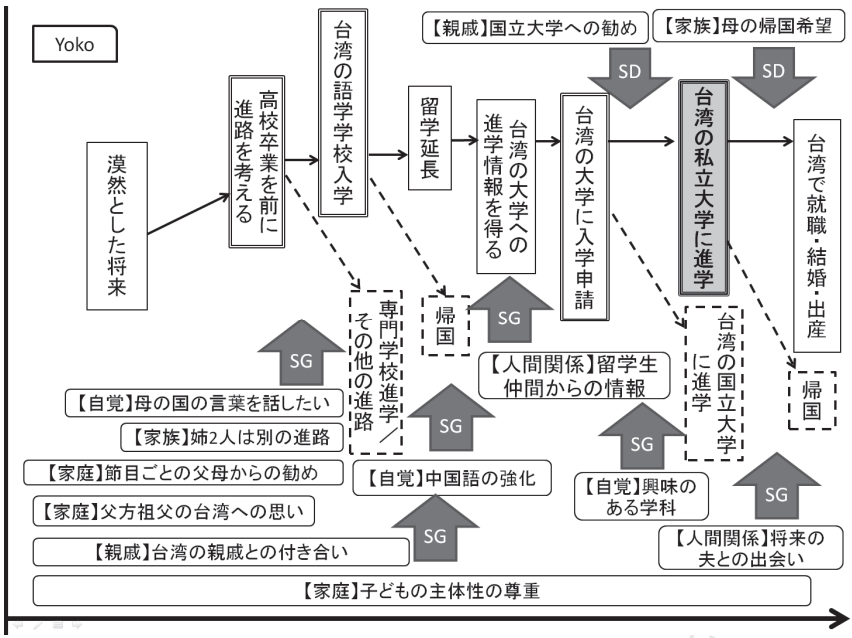


図 1　YOKO の TEM 図

臺灣大學學術期刊資料庫

（1）家庭環境

YOKO の父は、日本の統治時代の台湾で生まれた所謂「湾生」である。青年時代を過ごした懐かしい台湾に深い思い入れがある父方の祖父は、結婚適齢期になった父に台湾で台湾人女性との見合いを勧めた。その相手が母である。父方の祖父は台湾が好き、母方の祖父は日本が好きで、祖父同士は以前から交友があり、互いの信頼も厚かった。父母は互いの言語ができなかったが、意志疎通は日本語世代である自分の両親（=YOKO の母方祖父母）が手伝った。母は日本に興味があったわけではないが、母方祖父からは日本はいい所で日本人はいい人だと聞いて育ったことや周囲の勧めもあり、結婚した。結婚後は父の地元の三重県で、中華料理屋を夫婦で営んでいた。

母は来日後、生活の中で日本語を身につけ、家庭内外のコミュニケーションはすべて日本語でこなした。今は台湾よりも日本の三重のほうが生活しやすいと話しているという。

小学生頃までは、旧正月に母方の実家に家族で帰っていた。台湾のいとこたちとは言葉が通じなくても一緒に遊んでいたが、小学生になった頃、ふと”相手の言葉がわからない“ことに気づき、急にいとことの距離を感じた。それ以降は母に通訳を頼むようになった。

子どもの頃は、仕事をしている両親にかわって父方の祖父母が YOKO 姉妹の世話をし、学校の勉強は姉がみてくれた。保護者面談等の学校の行事には父が出席していた。父は積極的に子どもに関わっていた。箸の持ち方や座り方等の躾は父、健康管理に気を配るのは母であった。両親ともに学校の成績にうるさくはなく、常に子どもの意志を尊重してくれていた。

二人の姉は子どもの頃から明確な興味と目標を持っており、一人は美容師、一人はアメリカで仕事をする道に進んだ。

父方の祖父や湾生の父から常に“台湾ええとこやで”と聞かされていたので、そんな台湾との「ハーフ」であることに誇りを感じていた。周りに「ハーフ」は他にいなかったが、いじめられたり嫌な思いをしたことは不思議なことに一度もないと姉妹で話している。

臺灣人學學術期刊資料庫

知り合いで同様の家庭で育った同世代男性がいるが、父親からは母が台湾出身であることを隠すように言われて育った。自分は両親とも互いの国が好きな家庭に育って恵まれている。

（2）台湾への進学

台湾に来たのは、“もう 100 パーセント親の影響”である。中学校や高校への進学の際、折に触れて両親は台湾に行くことを YOKO に勧めてきたが、友だちと離れたくないので聞き流していた。高校は家政科で学び、卒業後は製菓学校への進学を漠然と考えていたが、卒業を控えた頃にまた両親に勧められ、台湾留学を考え始めた。

> YOKO: ああ、そういえばお母さん違う国の言葉しゃべるけど、お母さん 3 人も子どもおって 3 人ともできやんなと思って。＜中略＞で、私最後やん、私と思って。いやそんな心からお菓子作りたいって言うわけではないし、＜中略＞ちょっと行ってみようかな、ぐらいの気持ちでしたけどね。ちょっと、できるように。お母さんと話せるようになったらそれでいいや、ぐらいで。＜中略＞1 年も行けば十分やろって思ってたんですけど、まだ足りやんまだ足りやんみたいな感じでズルズル 2 年間行ってたんですけど。

台湾に行く目的は、母の母語を少しでも話せるようになることであった。当初は大学に行くことは念頭にはなかったが、台北市内の大学附設語学センターで中国語を学んで 1 年半ほど経った頃に、台湾の大学進学という選択肢を留学生仲間を通して知る。

> YOKO : 1 年半ぐらいで。あ、大学っていう方法もあるんやって周りからいろいろ話聞いたりして、え、大学行ってみようかなとも思い出したのが 1 年半ぐらいの時かな？1 年だけ勉強して行ってる子もいたんで、ああ行けなくもないんやとか思って。

そうして「國際生」として大学に入学申請をし、国立大学と私立大学の 2 校に合格した。入学申請に際しては台湾の親戚の人たちの助言や協力があったが、その選択には“（国立を蹴って）アホちゃう？みたいにものすごい言われましたけど”、自分の興味のある学科であ

臺灣人學與術期刊資料庫

った私立大学への進学を決めた。両親は、YOKO の語学留学も大学進学もとても喜んでいた。

大学を卒業してからは、母は娘には自分の傍にいてほしいという理由で、日本に帰ってくるように勧めたが、父の理解もあり台湾で台湾の会社に就職した。その後は大学進学後に知り合った台湾人男性と結婚し、夫婦で台北市内で飲食店を開業した。自営業の大変さを知っている母は反対したが、最終的には両親ともに応援してくれた。その後 YOKO は台湾で出産し子育てをしながら夫の店も手伝う。

2. TERU

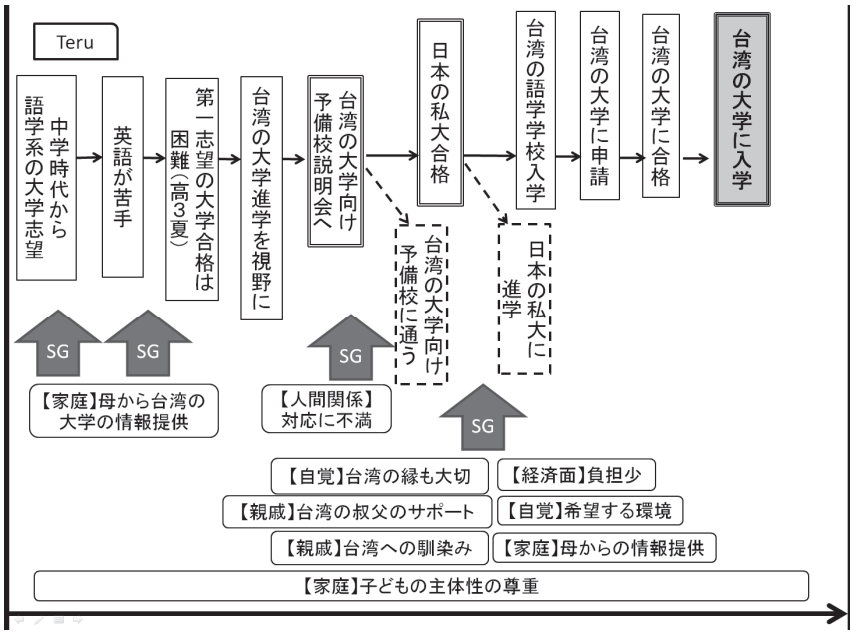


図 2　TERU の TEM 図

（1）家庭環境

母は日本で仕事をする祖父母に伴い、中学 2 年生の時に台湾から来日した。日本時代に日本の教育を受けた世代の祖父母は日本語が堪能であったが、母は兄弟ともに全く日本語がわからないまま日本の学校に編入し、それ以来ずっと日本で生活している。高校卒業後、

臺灣大學學術期刊資料庫

母は祖父の仕事を手伝った。日本にいれば日本人のように、台湾にいれば台湾人のように周りから見られる。小学生で来日した叔父（母の弟）は、中国語ができない。TERU の家族は 4 歳頃から小学生までは、旧正月等に家族で台湾に帰って親戚と会っていた。

TERU の母についての語りには、母への尊敬が溢れている。

> TERU：もうほんとに母さんはパワフルです。相変わらずほんとに母さんだけは怖くて逆らえません。＜中略＞母さんとしての威厳、小さい時からちゃんと教育してたので、威厳とかがありつつやっぱり逆らえませんっていう。アドバイスは必ず聞く。

家庭内では日本語のみを使用する。“日本語も本当に流暢で、たまにおかしいなと思うぐらいで、ほんとにきれいな日本語です”と評価する。母は中華、和食、洋食、どんな料理も得意だ。

茨城の地元で生まれ育った父は、子どもの教育には口を出すタイプではなく、両親が子どもの教育で意見が食い違うことはなかった。

2 歳上の姉は、県内の大学を卒業して現在は地元に就職している。大学で第二外国語として少し中国語を学んだが、TERU の影響で、もう少し勉強しようかなと考えている。中学生の妹は、今はまだ特に台湾や中国語に興味を持っている様子はない。

TERU の語りには、「台湾の血」という言葉が繰り返し使われていた。それをどんな時に意識するのかとの筆者の質問に、こう答えた。

> TERU：小さい時から、少しひねくれてたかもしれないんですけど、オンリーワンが好きだったんです。＜中略＞そこからいくと日本と台湾のハーフというのはオンリーワンじゃないですけど、自分を形成しているっていうのがわかってきたので、そこから徐々に台湾のことも知っていきたいなと。

直接被災はしていないが、中学生の時に東日本大震災の大地震を経験した。その時台湾からの支援が大きく報じられたこともあり、台湾と日本の架け橋になりたいと、東北の現状を伝え台湾の人に感謝の気持ちを表す台湾でのイベントにも積極的に関わっている。

TERU は中国語を学び始めてからは母に中国語で話そうとするが、

臺灣大學學術期刊資料庫

母は日本語で話す方が楽だという。

母方の祖父母は中国語も身につけたほうがいいと勧めていたが、台湾への進学を決めるまではその機会はなかった。

TERU：やっぱり田舎の家なんで父のおじいちゃんおばあちゃんは保守的な人なんですけど、昔は二ヶ国語を同時に学ぶと混乱するという考えがあったので、最終的には学べなかったんですけど、自分の中で思うのは、小さい時から学んでおけばよかったかなというのは今更だけど思いますね。あとは母さんは仕事が忙しかったので教える暇がなかったというのもありますね。＜中略＞僕たちもその時は特に必要ないと考えていたので。やっぱり需要と供給がなかったので、ま、今更なんですけど、やっぱりあそこでもう少し母さんに教えてって言っておけばよかったかなっていうのは、今少しの後悔なんですけど、でも今しゃべれるんで、自分でできることは自分でやっちゃえ、みたいなことは思ってます。

（2）台湾への進学

中学 1 年生の時に、いろいろな人とコミュニケーションを取りたいと漠然に考えるようになり、語学系の大学を希望していた。

TERU：英語はそんなにできなかったんですけど、コミュニケーション取りたい！が今度は台湾の親戚とコミュニケーションしたいと思うようになって、せっかくどっちの血も持っているのに、このまま疎遠になるのは嫌だなと。で、中学 2 年の時ですね。もうなんか徐々に、徐々に台湾に行くっていう話が出てきたので、そっちのほうに。母さんも絶対に行けっていうわけではなくて、どうどう？っていろいろ提案してくれて。

中学生の時に行った海外研修で英語が通じなかった悔しさに加えて、コミュニケーションしたい相手が台湾の親戚にも広げられていく。母親は台湾と日本それぞれの大学の長所と短所と受験の手順を説明してくれた。日本の大学に進学した姉の生活も参考になった。そうして台湾への留学を決めたので、後悔はしていない。

臺灣大學學術期刊資料庫

高校の時には成績面で志望校合格は難しいことがわかり、高校 3 年生の夏に台湾に行くことを決めた。台湾の大学進学準備としては、東京にある専門の予備校に行く方法もあったが、説明会での対応に不満を感じ、直接台湾に渡って語学留学から始めることにした。日本の大学も“記念受験で”私立大学 1 校に合格した。日本の私立大学にかかる費用よりも少ない経済的負担と学びたい環境を考慮して、台湾への進学を決めた。

台湾では伯父が勤務する大学の附設語学センターで 1 年間中国語を勉強した。その前は簡単な挨拶程度の中国語レベルであった。伯父は大学申請の際も、手助けをしてくれた。

「國際生」として台北市内の国立大学に入学した後は、中国語の専門用語を覚えるのに苦労したが、台湾人の同級生に聞いたり自分で調べたりして、授業について行った。大学卒業後は、モノ作りが好きなことを活かして、広い世界で仕事をしたいと考えている。

3. SOTA

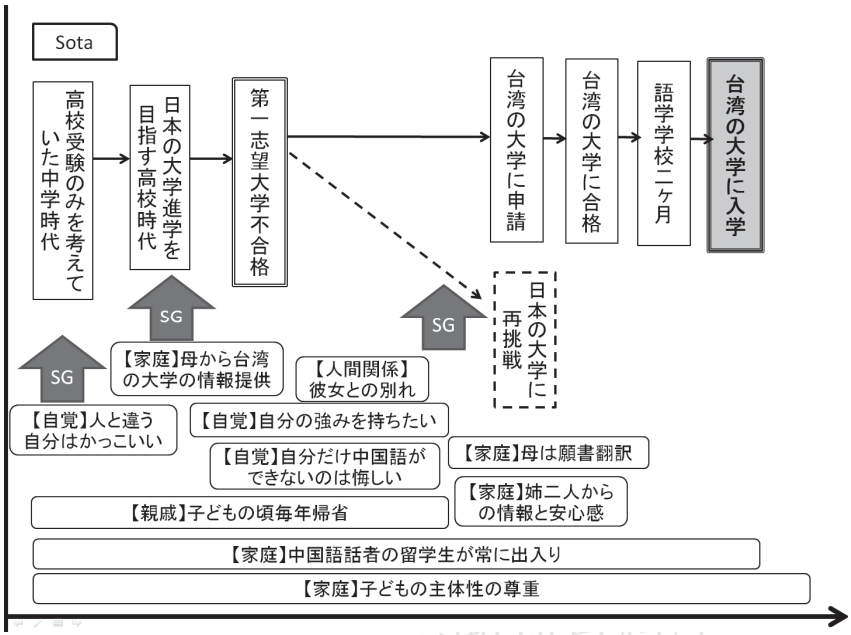


図 3　SOTA の TEM 図

臺灣大學學術期刊

（1）家庭環境

SOTA は両親と 4 人きょうだいの 6 人家族であるが、4 歳ぐらいの時から中華系の留学生が毎週末家にいるという環境で育った。国籍は台湾に限らず様々であるが、全員が台湾人や華僑等の中国語話者である。母の親戚や友人から始まり、知り合いが知り合いを紹介して広がった留学生たちは、家族同様の存在であった。金銭授受のないこの交流は、SOTA が大学 3 年生の頃まで 15 年余り続いた。

両親は、母親が専門学校生時代に出会って交際が始まった。父方の祖父母の一方は台湾出身であるが、ずっと日本在住であったため、父親は台湾の言語の習得経験はなかった。母親との出会いにより中国語の勉強を始めた。現在は会社の管理職に就いているが、中国語ができる人材として台湾や中国に出張することもある。

毎週入れ替わりで訪ねて来る留学生たちの中国語のおしゃべりには、母親は勿論、複雑でない話には父親も参加する。上の姉は子どもの頃から積極的に彼らの会話に入って行き、中国語もその中で話せるようになり、二番目の姉も頑張って加わっていた。SOTA と弟はそれをただ後ろで見ていた。

台湾には旧正月の時期に家族と帰っていたが、いとこたちとは“どう話していいかわからないから、ずっと苦笑いだけ”で、遊びで使う用語を覚えて“頑張ってコミュニケーション取ろうとしていた”。

母親は専業主婦で、家事や子育ての中心的役割を担っていた。子どもたちの学校行事にも母親が参加していた。はじめは苦労して悩んでいたこともあったが、3 人目になると“大御所感”が出てきて、先生とも知り合いになったので、うまく関係が築けるようになった。そして SOTA が高校生の時には、SOTA が知らないうちに PTA の役員になっていた。

母親は 8 人きょうだいで、台湾の親戚は多い。日本語を話すのは、日本時代の教育を受けた台北市に住む 90 代後半の祖父のみである。読書家の祖父は、SOTA が遊びに行くと、日本語や中国語で読んだ本の内容について 5 時間に及んで日本語で語ることも珍しくない。

臺灣大學學術期刊資料庫

親戚に会うのは母が台湾に来た時に一緒に行く程度である。“なんか質問攻めされるのがしんどい”し、祖父に会うと“しゃべれないから逆に辛い。（頷くだけなので）首がしんどくなる”。台湾の祖父にとって、家族の中でSOTA一家は唯一日本語での話し相手である。

姉2人は台北市内の大学附設語学センターでの中国語学習を経て台湾の大学に入学した。上の姉は日本で就職したが、下の姉は台湾で仕事に就いている。弟は日本の大学に進み、中国語はできない。

中華系留学生の中国語が常に飛び交う家庭であったが、家族の間では日本語のみが使用されていた。留学生たちとの付き合いが母親にとっての中国語が話せる場になっていたのかという筆者の問いに、“結構お母さんにもリラックスできる場やったと思うんで、なんで続けてきたんやなって思いますね”とSOTAも振り返る。

「ハーフ」であることの意識の変化については、次のように語る。

> SOTA：昔小さい頃は、なんでお母さんが台湾人、＜中略＞外国の人っていうのがなんか、＜中略＞ちとコンプレックスではないんですけど、なんか周りと違いすぎて。違うって言うか、お母様同士で話している時の日本語も変やったり、なんか小学生やとデリカシーのないことを言うんで、そういう時にちょっと傷ついて、なんでみんなと違うんやって思いはあったんですけど、成長してったら、なんか逆にそれってかっこいいことじゃないのか、周りと違うことって、って。

その意識の変化が起こった瞬間を、SOTAは鮮明に覚えている。中学3年生の夏休み前のある日、夏休みは暇だという同級生の声の中で台湾に帰る予定がある自分は特別でかっこいいのではないのか、とふと思ったのだという。

母親が台湾出身と知ると、台湾語/中国語ができるか必ず聞かれた。“僕はできないってずっと言ってました。なんでできひんの、って言われるのもよくあったんですけど”“そんなに環境整ってんのになんで話さんの？みたいな感じで、大人の方なんだけど”という経験を重ねて“はじめはすごく悩んでたんですけど”、“言われ慣れすぎ

臺灣人學學術期刊資料庫

ましたね。（笑）慣れすぎて態度がでかくなりました”と振り返る。

SOTA:なんか、その時割り切れてたんで、その時はお母さんが、＜中略＞20歳ぐらいからずっと日本にいたから、もうしゃべれるようになって、そういう、中国語をしゃべらなくても自分は日本語でいけるんや、っていう生き様を見せてくれた。気にしてない。日本語でいいねって。ああ、今思い出したけど、そこから母から行動力みたいなのを身につけた気がしますね。なんか、何をするにもあんまり不安に感じない。やってみてから何かあったら考えようという、そういうことを学びましたね。

そして、母親のことを“強いです”“強いんです”と繰り返し、父親もそういう母に影響を受けた。そして、中華系留学生の受け入れをしている両親は、“息が合っていて”“活き活きしている”と話す。

（2）台湾への進学

台湾への進学を念頭に置くようになったのは、二つの理由がある。一つは家に来る留学生や両親、姉たちが話す中国語が自分だけできないのは悔しいということ、もう一つは自分に自信を持てなかった高校時代に、周りとは違う強みを手に入れたいと考えたことである。

大学受験は、日本と台湾の両方を視野に入れた準備をしていた。日本の第一志望の大学に不合格となった時には再度の挑戦も考えたが、姉二人が提供してくれる台湾の大学進学情報もあり、更には彼女と別れたばかりで“ビッグになって別れたことを後悔させてやろう”という気持ちにもなっていて、“だからあの時は燃えて”いた。

母親は台湾国籍なので、「僑生」として台湾の大学に申請した。姉たちが台湾の大学に進学した時は、SOTA は中学生だったこともあり台湾への進学は念頭になかったが、高校 2 年生後半の頃、母親が少し台湾への進学の話もしてくれた。申請の際には姉たちや母の協力が大きかった。また、これまで家に来ていた多くの留学生が台湾にいることも心強かった。

台北市内の国立大学への進学が決まると、姉たちと同様に、台北市内の大学の語学センターに 2 ヶ月通い、基本的な中国語を学んだ。

臺灣大學學術期刊資料庫

その年の 9 月から大学の本科の正規留学生として入学した。SOTA 以外の「僑生」は中国語は母語話者レベルだったので、“甘くみていた”と痛感し、専門用語を含めた中国語習得に努力を重ねてきた。

大学 4 年生の現在は、就職について焦りを感じている。日本の大学に進んだ同学年の友人は既に就職活動が終わっているが、台湾では男性の兵役もあり卒業後に仕事を決めるのが一般的である。日々大学の課題に追われる中で、“出遅れているんじゃないかっていう不安がいっぱい”ある。将来は日本を拠点にいろいろな国と関わる仕事に就きたいと考えている。

（二）等至点への過程を支える要因

前節では、TEM 図によって YOKO、TERU、SOTA の 3 人の「台湾の大学への進学」という等至点への過程には、どのような選択肢があり、そこでどのような阻害要因（SD）或いは促進要因（SG）があったのかを可視化した。

YOKO は少し中国語が話せるようになりたいという願望、TERU と SOTA は日本の大学受験で第一希望合格が叶わなかったことが、来台の選択要因であった。大学の入学申請は、母親が日本国籍を取得している YOKO と TERU は「國際生」、母親が台湾籍のままである SOTA は「僑生」として行っている。

こうした三者三様の中にも、共通する 3 つの促進要因（SD）が見られた。それは、【家庭】と台湾の【親戚】と自身の【自覚】である。

1. 家庭

対象者は子どもの主体性を尊重する家庭に育ったとそれぞれ話す。学校の勉強や進路は対象者の個性や興味を重視し、台湾への進学も折に触れて勧めることはあっても、親からの押し付けはなかった。

家族間で中国語は使われていなかったが、父親が台湾好きであったり海外との交流に積極的であったりした。

2. 親戚

高校を卒業したばかりで中国語習得もこれからという中で、台湾の【親戚】は心強い存在である。3 人は子どもの頃は毎年旧正月等

臺灣大學學術期刊資料庫

に台湾に家族で帰省しており、現在も親戚とは親しい付き合いが続いている。YOKO と TERU は台湾での大学申請の際にも手伝いが得られ、SOTA は嘗て家に来ていた元留学生たちともつながっている。

3. 自覚

家庭環境や周りのサポートがあっても、本人の意志なくしては行動には至らない。“台湾はええとこやで”“広い世界を見なさい”と言われて育ち“母の言語を習得するのは自分しかいない”と考えた YOKO、“たくさんの人とコミュニケーションを取りたい”“台湾の血も大切にしたい”TERU、“自分だけ中国語ができないのは悔しい”“人と違う強みを持ちたい”SOTA は、当時の状況や性格から生じた自覚が選択の決め手となった。

（三）中国語習得をめぐる意識と日台「ハーフ」としての経験

本節では、対象者の家庭内で中国語が継承されてこなかった背景とそうした中での日台「ハーフ」としての経験について考察する。

1. 中国語が継承されてこなかった背景

この前提には、対象者の母親たちの日本語能力の高さがある。TERU の母親は中学 2 年生の時に親の仕事の関係で来日し、日本の高校を卒業している。SOTA の母は日本の専門学校で服飾を学んでいた。結婚が来日のきっかけであった YOKO の母は、生活の中で日本語を身につけた。家族としてのコミュニケーションが十分に取れる日本語能力があった上、仕事をしていた YOKO と TERU の母親は、日本で使う機会が少ない中国語をわざわざ子どもたちに教える時間もなかった。専業主婦であった SOTA の母親は、家族同様に付き合う中華系の留学生たちという中国語を使う相手もいた。YOKO の母親は“（台北よりも日本の）三重のほうが住みやすい”、TERU の母親は“子どもとは日本語で話すほうが楽”と言っているという。

更に、台湾と日本の歴史的な関係が挙げられる。

社会や学校での使用言語とは異なるルーツ言語を子どもに習得させたいと願う親の期待するレベルは一様ではないが、共通するのは「祖父母や親戚との意思疎通」である（服部 2015、近藤他 2019 等）。

臺灣人學學術期刊資料庫

本研究の対象者の台湾の祖父母は、日本時代に日本語で教育を受け日本語が堪能であった。YOKO の祖父母は結婚前は両親をつなぐ役割もし、TERU の祖父母は日本でビジネスをしていた。SOTA の祖父にとっては今では SOTA やその家族が家族の中で唯一日本語で話せる相手となっている。これは他国にはない台湾の特徴だといえるだろう。勿論台湾の祖父母が日本の教育を受けた人でない場合もあるし（服部 2018）、この状況も今後世代交代により変わっていく。

台湾の親戚には日本語ができる人は少ないが、1 年に 1 回の台湾への母の里帰りでは、YOKO や SOTA の語りにもあったように、母に通訳を頼んだり、遊びに関連する言葉を覚えたりして凌いできた。

対象者たちも祖父母とは意思疎通ができる上、日本で中国語を使う機会もないため、特に不自由は感じなかったということである。花井（2016）の日本在住韓国人母親と同様に、母親の高度な日本語習得と日本社会への順応に加え、そうした母親の能力と歴史的な関係から、渡辺他（2016）が述べるように、母親の家庭内での役割においては中国語習得が入り込む必要性がなかったと言える。

2. 日台「ハーフ」としての経験

母親が台湾出身と知ると、「中国語（或いは台湾語）はできるの？」という質問をほぼ必ずされてきた。そんな時は、一様に「できない」そして「母親が日本語ができるので」と答えた。SOTA は“言われ慣れ過ぎた”というその経験が嫌だったが、やがて開き直る。

また、SOTA は母親の話す日本語が他の母親と違うこと、それが小学生の時はからかいの対象になったことに傷ついた。そんな SOTA は中学生の時に、そして TERU は小さい時から、「人と違うこと」に肯定的な感情を持っていた。

YOKO は父親が湾生であり、台湾への思い入れの強い父方の祖父からは常に台湾のよさを聞いていたので、自分はそんな国との「ハーフ」であることを誇りに感じていたし、姉妹たちも「ハーフ」ということで嫌な思いをしたことは一度もないという。

陳（2013）では、日本で継承語が習得されにくい一因として、日

臺灣大學學術期刊資料庫

本の同化圧力を挙げているが、本研究の対象者たちは「ハーフ」であることは、「かっこいい」「誇り」として受け止めていた。とはいえ、SOTA の“なんか周りと違いすぎて”という言葉にあるように、同化圧力はなかったとは言い切れないであろう。

一方、台湾の小学校に通う台日「ハーフ」の日本人の母親を対象にした服部（2005）では、台湾の友だちの前で日本人の母親が日本語も中国語も使うのを嫌がるという事例も報告されている。そして、これは子どもの性格や状況によるとしている。こうした感情は、国を問わず小学生という発達段階にも関係があるのではないだろうか。

また、同化圧力は母親自身が受けていた可能性もある。SOTA は母親の出身に関係なく回ってくる PTA の仕事のことで当初はとても悩んでいたと話す。また、YOKO の家庭では学校行事への対応は父親の役割であった。黄（2011）では、国際結婚において大切なことは、深い意思疎通ができる言語能力と、特に居住国出身の配偶者の配慮だとされている。YOKO の父親は母親にとっての困難点を理解しそれを自身の参与で補っていた。YOKO は、自分とは反対の状況として、母親が台湾出身であることを隠すように日本人の父親に言われて育った知り合いの日台「ハーフ」の話をしていた。

父母の家庭内での支え合いと互いの国や言語に対する尊重も、日台「ハーフ」としての誇りにつながっていたことが推測される。

五、まとめと今後の課題

（一）進路選択の過程

「台湾の大学に本科の正規生として留学する」という等至点は、単に「母親が台湾出身」ということで一直線に向かうものではなかった。それは援助的な要因として作用しているが、等至点への過程は、実に三人三様である。また、同じ家庭に育った兄弟姉妹が同様の道を辿るわけでもない。

（二）母親についての語り

その 3 人に共通するのは、母親に対する尊敬と誇りである。

臺灣人學學術期刊資料庫

異国の生活の中で母語以外の言語で家庭を支え、そして自国の情報を得て子どもの進路選択に寄り添ってきた。対象者の母親についての語りの中では、“勇気がある”“強い”“すごい”等の言葉が繰り返し使用されていた。

陳（2013）では、はじめは子どもに日中二言語教育を行いつつも成長につれて日本語のみになることが報告されている。本研究では、母親の意向を知ることはできないが、自身の母語の継承はしなくても、家庭内外の生活や仕事をこなす日本語能力を習得し、子どもの教育戦略にも主体的に関わっている母親の姿があった。

「中国語はできるの？」という問いに答えるのがとても嫌だったSOTAが行き着いたのは、“（母親は）中国語をしゃべらなくても自分は日本語でいけるんや、っていう生き様を見せてくれた。（だから自分は中国語ができないことは）気にしてない”という考え方であった。

（三）3名の事例から見える背景

対象者3名の「台湾の大学への進学」に至る過程には、日本の教育システムを受けて育つ中で、①子どもの主体性を重視した家庭教育、②子どもの頃の定期的な台湾への帰省と親戚付き合い、③必要な時に家族や台湾の親戚によるサポート、④本人の自覚、⑤母親の子どもの教育に対する主体的な関わりの存在を知ることができる。

3名は家庭内では母親の母語は継承されてきておらず、母親は高度な日本語能力で家庭や社会に対応してきた。日本統治時代に日本の教育を受けた台湾の祖父母とは日本語で意思疎通ができた。中国語或いは台湾語ができないことについては、周りの反応に傷ついたり気にしていなかったりと対象者によって異なる。

3名は日本人の父親の姓を名乗り、日本国籍のみを有している。身体的特徴を含めた外見からは「ハーフ」であることは可視化されていない。それが「ハーフ」の中でも異なる経験に結びつくことが下地（2018）で報告されている。

ただ、本稿の対象者が台日「ハーフ」の全てではないことは言う

臺灣大學學術期刊資料庫

までもない。服部（2018）では、子どもの教育に関与しない母への反発から生じた台湾への否定的な感情を払拭するために台湾に留学をした事例や、台湾へのルーツも意識して母親に中国語を教えてほしいと言ったが仕事が忙しくて教えてもらえなかったため、大人になってから自らの意志と経済力で台湾に留学に来たという事例も報告されている。

本稿は、決して日台「ハーフ」の進路選択過程を一般化するものではないしこうあるべきだというものでもない。しかし、目的とする日台「ハーフ」の「台湾の大学への進学」という同じ事実の背景にある異なる道筋の一例を示すことができたのではないかと考える。

（四）今後の課題

本研究の最大の限界は、対象者の人数が少ないことである。YOKOの入学時期が他の 2 人と離れている感も否めない。今後はより多くの日台/台日「ハーフ」への調査を通して、進路選択における多様な過程を示すことができるよう努めたい。更に、TEA の方法においてTEM 図以外にも、「発生の三層モデル（Tree Layers Model of Genesis: TLMG)」等も用いて、個人の価値観やアイデンティティ等、心理面の変化にも注目していきたい。

進路は、日台「ハーフ」という一つの属性だけで決まるものはない。本研究によって示された多様な道筋が、複数の言語文化的背景を持つ人やその関係者にとって一つの参考になれば幸いである。

【参考文献】

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）「複線径路等至性モデルの TEM 図の描き方」『立命館人間科学研究』25、pp.95-107、立命館大学人間科学研究所

陳麗君「日本における台湾人移民の言語継承をめぐって－日・台国際結婚を対象に―」日本台湾学会第 15 回学術大会

花井理香（2016）『国際結婚家庭の言語選択要因－韓日・日韓国際結

臺灣大學圖書館期刊資料庫

婚家庭の言語継承を中心として』ナカニシヤ出版
服部美貴（2005）「台湾在住の日台婚姻家庭における子どもの日本語習得に関する基礎的研究」『台湾日本語教育論文集』第九号、pp.251-282、台湾日本語教育学会
服部美貴（2015）『台湾に生まれ育つ台日国際児のバイリンガリズム』台灣大學日本學研究叢書 16、台灣大學出版中心
服部美貴（2018）「日本育ちの日台『ハーフ』が中国語学習を始める時」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会 2018 年度研究大会予稿集』pp.82-83、MHB 学会
黃若筑（2011）『台日「難」婚—離異率最高的異國婚姻』國立台灣大學新聞研究所碩士論文
鏡愛一郎・中西さやか・中坪史典（2012）「子どもの経験を質的に描き出す試み—M-GTA と TEM の比較—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第 61 号、pp.197-206、広島大学大学院教育学研究科
川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編（2018）『移動とことば』くろしお出版
木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い』弘文堂
三好真人（2019）「質的研究の諸方法の特賞－各方法論におけるアプローチの検討」末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之編著『「主観性を科学化する」質的研究方法入門　TAE を中心に』第 12 章、金子書房
成田絵吏（2016）『青年期の進路選択に関する親のサポートの研究』名古屋大学博士論文、名古屋大学
額賀美紗子（2013）『越境する日本人家族と教育　「グローバル型能力」育成の葛藤』勁草書房
サトウタツヤ（2015）「複線径路等至性アプローチ(TEA)」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編『TEA 理論編　複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』1 章-1、新曜社

臺灣大學學術期刊資料庫

サトウタツヤ（2019）「複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)」末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之編著『「主観性を科学化する」質的研究方法入門　TAE を中心に』第 7 章、金子書房

下地ローレンス吉孝（2018）『「混血」「日本人」　ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社

塩入すみ（2019）『ロケーションとしての留学　台湾人留学生の批判的エスノグラフィ』生活書院

末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之編著（2019）『「主観性を科学化する」質的研究方法入門　TAE を中心に』、金子書房

竹田美知（2015）『グローバリゼーションと子どもの社会化【改訂版】－帰国子女・ダブルスの国際移動と多文化共生－』学文社

渡辺幸倫・藤田ラウンド幸世・宣元錫・李坪鉉・裘暁蘭（2016）「多文化家庭の子育て戦略の課題―日韓中の国際カップルへのインタビュー調査―」『相模女子大学文化研究』第 34 号、相模女子大学文化研究会

山本ベバーリアン・渋谷真樹・敷田佳子・キム ヴィクトリヤ（2013）「国際結婚家庭の教育戦略」志水宏吉・山本ベバーリアン・鍛冶致・ハヤシザキカズヒコ編著『「往還する人々」の教育戦略　グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』第 2 章、明石書店

Yamamoto Masayo. (2001) *Language Use in Interlingual Families; A Japanese-English Sociolinguistic Study*, Multilingual Matters, Tronto

安田裕子（2015）「等至性と複線径路」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編『ワードマップ　TEA 理論編　複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』2 章-1、新曜社

臺灣大學學術期刊資料庫

編輯室報告

1. 本期投稿數共 14 篇（校外稿 12 篇，校內稿 2 篇），經審查通過者共計 6 篇（校外稿 4 篇，校內稿 2 篇）。本期通過率為 42.8%。
2. 本期刊每年於 6 月 30 日及 12 月 31 日各發行一期。歡迎從事日本文學、日語語言學（含日語教學）、日本文化（社會科學除外）研究者踴躍投稿。
3. 台大出版中心電子期刊：http://ejournal.press.ntu.edu.tw/
4. 台大日本語文研究期刊網址：
   http://www.japan.ntu.edu.tw/japan-ch/kenkyuu.php

本期刊獲 98-103 年度科技部人文社會科學研究中心 THCI Core

本期刊收錄於科技部人文社會科學研究中心 2018 台灣人文學核心期刊 THCI 第一級

本期刊獲 109 年度國立臺灣大學學術性期刊補助編輯費用

臺灣大學學術期刊資料庫

《台大日本語文研究》投稿規定

1. 資格：凡從事日語語言學（含日語教學）、日本文學、日本文化研究者皆可投稿。每次投稿每人以一篇為原則，且不得一稿兩投。
2. 內容：關於日語語言學（含日語教學）、日本文學、日本文化（社會科學除外）等未公開發表之論文。使用文字限日文。恕不接受碩博士論文改寫之論文。
3. 樣式、繳交份數及審查費：
   A4 大小橫寫 Word 原稿。審查費 2,000 元以現金袋掛號繳交。
   （1） 原稿（記名原稿乙份，不記名原稿三份，電子檔以 e-mail 寄送）
   請將以下的項目依順序，全部以 30 字×30 行×30 頁以內（含中、英、日文摘要）格式排版。
   ①中、英、日摘要與關鍵詞（至多五個）
   ②作者所屬單位職稱（中、英、日文，僅限記名稿件）
   ③論文名稱（請加註英文之論文名稱）
   ④作者姓名（中、英文，僅限記名稿件）
   ⑤本文　　本文（含圖表）
   　　註（隨頁註）
   　　參考文獻、資料
   ※ 無記名之原稿中請避免列出姓名、單位職稱等與作者本身相關之資料，謝辭等文字於審查階段中請勿列入本文。
   ※ 電子檔請另以 E-mail 寄到 ntujpstudies@gmail.com，在主旨請註明為「台大日本語文研究第○○期投稿」
   （2） 附件（一份）
   請書明論文名稱、作者姓名、所屬單位、職稱、聯絡方式（地址、電話、傳真、電子郵件）。若為共同執筆，請明確寫出聯絡代表者。
   稿件內涉及版權部分，請事先取得原作者或出版者書面同意，本刊不負版權責任。
   （3） 著作授權同意書（中、英文各一式兩份）
   可至本系出版刊物網頁（http://www.japan.ntu.edu.tw/japan-ch/kenkyuu.php）下載。
4. 稿件寄送處：106 台北市羅斯福路四段一號　台大日文系辦公室
   （不論是否刊登，所繳交之稿件一律不退還，請自行備份）
5. 審查：編輯委員會原則上由本系及外校之學者專家組成，所有稿件先經由本刊編輯委員會初審，通過後送交三位相關領域之專家學者複審決定是否刊登。審查意見分為三種：1.刊登，2.修改後刊登，3.不刊登。
6. 本期刊於每年 6 月 30 日及 12 月 31 日發行，一年二期。截稿日（每年 3 月 31 日及 9 月 30 日）後舉行編輯委員會進行審查，惟稿件不及於當期刊登者則併入次期刊登之。
7. 刊登者贈送抽印本 20 份及期刊 3 冊，不另致酬。
8. 本刊刊載之論文，非經本系同意，不得轉載至其他刊物。
9. 本刊為國立臺灣大學出版中心出版之學術期刊，除印行紙本之外，同步收入國立臺灣大學出版中心所建置的國立臺灣大學學術期刊資料庫，進行電子出版，來稿需同意同步電子出版方能採用。

臺灣大學學術期刊資料庫

聯絡處：台大日文系！電話：02-3366-2792！FAX：02-2362-1874！E-mail：ntujpstudies@gmail.com

《台大日本語文研究》論文格式

※A4 大小紙張、橫寫、Word 檔原稿、30 字×30 行×30 頁以內（含中、英、日文摘要各一頁）

餘白：上下各 2.54cm　　左右各 3.17cm

※請依下列字體格式書寫

		本文及其他	小標題
Windows Word (檔名.doc)（檔名請使用英文書寫）	日文	MS　Mincho	MS　Gothic
	中文	新細明體	中黑體
	英文	Times New Roman	Arial
	數字	Times New Roman	Arial

1.中、英、日文摘要與關鍵詞（作者姓名、所屬單位職稱僅限記名原稿）

2.內文

論文名稱：14p「Gothic 体」置中

作者姓名：12p「明朝体」置中（僅限記名原稿）

本文（圖表、注、參考文獻、資料）

本文：12p「明朝体」

注：10p「明朝体」（請使用 Word 中的「註腳」功能、隨頁注）

參考文獻內容：12p「明朝体」

資料：12p「明朝体」

摘要書寫範例如下：

中文題目（中黑體 14p、置中）

（空一行）

作者姓名(新細明體 12p)*（插入註腳）

（空一行）

摘　要（新細明體 14p、置中）

（空一行）

摘要內文(新細明體 12p)……

……..……

……。

（空二行）

關鍵詞：第一個　第二個　第三個　第四個　第五個

*作者所屬單位職稱（新細明體 10p）

臺灣大學學術期刊資料庫

英文題目（Arial 14p、置中）

（空一行）

作者姓名（Times New Roman 12p）*（插入註腳）

（空一行）

Abstract（Times New Roman 14p、置中）

（空一行）

摘要內文(Times New Roman 12p)……

……...…

……。

（空二行）

Key words: 第一個　第二個　第三個　第四個　第五個

*作者所屬單位職稱（英文）（Times New Roman 10p）

日文題目（MS Gothic 14p、置中）

（空一行）

作者姓名（MS Mincho 12p）*（插入註腳）

（空一行）

要　旨（MS Mincho 14p、置中）

（空一行）

摘要內文(MS Mincho 12p)……

……...…

……。

（空二行）

キーワード：第一個　第二個　第三個　第四個　第五個

*作者所屬單位職稱（日文）（MS Mincho 10p）

臺灣大學學術期刊資料庫

＊ 論文名稱與作者姓名之間空一行。
＊ 作者姓名與本文之間空一行。
＊ 標題 12point「Gothic 体」，子目次序請依下列方式標明
第一章、第一節、第一項、…… → 一、(一)、1、(1)
＊ 僅於章與章之間空一行。
＊ 分段與引文：
中文論文每段第一行第一個字空二格，引用文每行空三格。
日文論文每段第一行第一個字空一格，引用文每行空二格。
引用文與本文間無需空行。
＊ 圖表內的文字盡可能比照本文，與本文之間原則上空一行。
＊ 參考文獻（12point「Gothic 体」）
＊ 參考文獻內容（12point「明朝体」）
文獻按 abc 字母人名或年代順序排列；專書按著者名或編者名、出版年代、書名、版、(出版地)、出版社、頁數排列；論文按著者、出版年代、論文名、刊載書名、卷號、(出版地)、出版社、頁數排列。惟論文集同專書。

參考文獻書寫範例如下：

參考文獻

赤羽研三（1998）『言葉と意味を考える（1）隠喩とイメージ』夏目書房

天野みどり（1990）「複主格文考」『日本語学』9-5、東京：明治書院、pp.285-303

天野みどり（1995）「「が」による倒置指定文―「特におすすめなのがこれです」という文について―」『新潟大学人文学研究』88　新潟大学

臺灣大學學術期刊資料庫

NTU Studies in Japanese Language and Literature

No.39 Jun. 2020

Contents

Chen-nan Lai	The Ideal Male Figure in Utsubo Monogatari : A People Pleaser of Nakatada's Character	1
Tseng Chiu Kuei	Reading Yoko Tawada's "Chikyu ni chribamerarete" from the perspective of ecofeminism in the global era,: Fostering new dreams without borders	27
Fan, Shu-wen	Violence of "After the Quake" from Haruki Murakami with "Landscape with Flatiron" and "Thailand"	49
Masaaki Takechi	How is "national theory" discussed? From the viewpoint of the study of Kokugaku in recent years	75
Yuji Ochiai	Qualitative Research in the Humanities on Japanese Language: Applications and challenges of text mining methods	101
HATTORI Miki	Process of Selecting Courses by Students Who Grew up in Japanese-Taiwanese Intercultural Families in Japan	131

臺灣大學學術期刊資料庫